伊平屋村

【人口、世帯】1430人、563世帯（2008年３月末）
【面積】21.72平方キロメートル
【沿革】1908（明治41）年４月１日村制施行、39（昭和14）年７月１日伊是名村が分離

平成２０年１１月５日（水）　―沖縄タイムス（朝刊）―

41ビジョン～新公共時代のまちづくり 27

提言360°アイ

島生かし産業展開

宮城富夫・名嘉紀登氏
（伊平屋米浜会役員）

私たちが小さいころと比べると、島は大きく変わった。40年以上も前だけに当然だが、それでも美しく舗装された道路、不自由ない生活を保障する上下水道など、生活基盤の整備は格段に進み、目を見張る。

こう振り返ると、30年先を見通すのは難しいが、現実的にはまず伊平屋と伊是名は合併しているだろう。そして空港ができ島伝いに橋も架かり、交通の便も良くなっていることは想像できる。

問題は、こうした大きな基盤ができても、島を維持するために若者が定着できる産業をどう興していくのか。財政を国に依存できる時代ではなく、行政のリーダーも経営感覚が求められるはずで、住民も同様だ。

その点、伊平屋の資源は豊富。例えば、伝統的な米の輪作物として注目される紅芋は、本島より3度低い気温の関係で冬場は虫が付かず、農薬いらずの栽培が可能。食の安全が問われる時代に沿った価値ある産物を生み出せる。

本島と比べて赤土の流出が少なく、下水道も完備されているため、島の海域は清浄。今も価値は高いが、伊平屋産モズク、与論島からも訪れる好漁場は観光も含め幅広い産業展開ができる。こうした産業があってこそ空港や橋も生かされる。

島出身の企業人、郷友会組織は、祭りやムーンライトマラソンなどの行事に協力しているが、伊平屋の将来にとってこのネットワークをもっと活用し、島を盛り上げることも重要。

小さな島だけに人間関係の問題で逆に難しい側面もある。しかし、今後は島の人と島外の企業人らが融和を図り、産業振興、島への定住人口の増加につなげたい。

みやぎ・とみお（右）1953年村島尻出身。86年上城技術情報＝本社・宜野湾市＝を設立。現米浜会副会長。

なか・のりもと　55年同出身。現米浜会事務局次長。